

高等学校 芸術科（音楽） 学習指導案

指導者 原 寛暁

- 日 時** 令和7年11月28日（金） 第1限 9:30～10:20
場 所 第2音楽室
学年・組 高等学校I年 芸術音楽選択イ組 42人
単 元 Flat for Education を使用した編曲活動の試み
目 標
 - Flat for Education の操作、基礎的な編曲知識を身につける。（知識及び技能）
 - 短い楽曲を使用し、リズムや和声、楽器編成等を工夫し編曲することによって、自分なりの表現を拡げ深める。（思考力、判断力、表現力等）
 - 他の生徒の作品を相互鑑賞、相互評価することによって、良いところや更に良くなりそうな点を適切に指摘し合う。（学びに向かう力、人間性等）

指導計画（全8時間）

- 第一次 Flat for Education の基本的な操作方法について学習し、色々と確かめながら自分の編曲作品の方向性を探る 2時間
- 第二次 編曲段階に入る。プロセスでは、途中段階を自由に相互鑑賞する 2時間
- 第三次 中間発表を行う。編曲者は工夫点をまとめて発表する 2時間（本時 6/8）
- 第四次 中間発表で相互に指摘し合った課題を元に作品を磨き、仕上げる 2時間

授業について

本単元は、今年度初めての創作的な取り組みである。昨今、音楽の世界ではDTM（デスクトップミュージック）の需要は高まる傾向にある。コンピュータを使用した楽興創作のツールは様々なものが存在するが、学校の音楽授業で取り上げる意味を考えるに、やはり五線の読み書きの力を育てることが必要だと授業者は考えた。授業者は、先行導入校（中学校）の授業実践を参観する機会があり、教育的な機能が豊富な「Flat」の存在を知った。高校選択芸術音楽の授業では、どのような展開が可能であるか？という疑問が、本単元を始めるにあたっての主な動機であった。対象クラスの生徒たちは概ね音楽の活動に対して前向きであり、器楽活動・歌唱活動どちらも前向きに取り組むこと出来る集団である。しかしながら、今回の創作領域（編曲）のような授業は初めての事であり、生徒のみならず授業者自身も手探りの状態である。ただ時代背景が後押ししているのか、コンピュータを使った音楽活動そのものについては興味を持って取り組み始めている。この学年にはあと2つ（全体で3つ）の同規模の音楽選択クラスがあるが、同単元での授業を展開中である。

今後の見通しであるが、年が明けて3学期には3月頭を目標として「フリーアンサンブル」の取り組みというものを本校音楽では昔から行ってきた。授業者としては、今回のDTMの単元によって、コンピュータ使用が音楽表現の重要な選択幅として結び付いていくことを期待しているところである。

題 目 コンピュータソフトを用いた編曲作品の相互鑑賞と評価

本時の目標

- 自分のパソコンを用い、基礎的な編曲知識を学ぶことができる。（知識及び技能）
- 他者の作品から学ぶポイントを整理し、自分の作品の磨き段階に生かすことが出来る。（思考力、判断力、表現力等）

3. 適切な相互評価を行い、3学期のアンサンブル活動に生かすポイントを整理する。
 (学びに向かう力、人間性等)

本時の評価規準（観点／方法）

1. パソコンを効果的に用いて、ここまで工夫した経過を分かり易く伝えることができている。(知識・技能／生徒の活動観察、作品評価、ワークシート(後日))
2. 発表者は自信を持って工夫点を発信し、他の生徒も相互発表によって得られた学びを自身の最終調整に生かすことができている。(思考・判断・表現／ワークシート(後日)、作品評価)
3. 鑑賞者は、他者の良いところを発見し、課題を適切に述べることができている。
 (主体的に学習に取り組む態度／生徒の活動観察)

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
各自のパソコンの準備 <導入> 本時の活動内容の確認 ① 発表者は本時の発表内容の整理 ② 発表しない生徒は、自分の作品のこれまでの取り組みをまとめ <展開> ・中間発表 <まとめ> ・最終段階に向け進めていく内容を、各自ワークシートにまとめる ・最終提出に向けて	各自の起動確認・接続確認 ワークシートの配布 発表者(目安10名)→準備 ・発表者1 これまでの取り組みの経過発表(PPTを推奨) ・作品の全体鑑賞 ・質疑応答>気づきの共有(良い点と課題を適切に相互評価) ↑これを続けていく ・各自が必要な支援のポイントをまとめ、把握する ・時間数の把握と片付け ・ワークシートの回収	起動/接続不良など不具合への対応 ・配布の補助 ・発表要点の確認 ① 特に工夫した点・苦労した点(音楽の要素に絡めて) ② 最終作品提出に向けての課題(発表前の時点での自己評価) ・進行の補助 ・気づきの補足 ・どんな支援が必要なのかを訊ねる ① 技術的な操作など ② 編成変更や和声などの(編曲上の)音楽的な諸要素 ③ その他 ・3学期のフリーアンサンブルに向けての関連性

備考

生徒個人所有のパソコン(各自持参)、配布ワークシート、筆記用具

<板書計画>

- ① パソコンのセッティング(発表者はパワーポイントの準備)
- ② 相互鑑賞 → 質疑応答 → 自分の仕上げ作業に行かせることを整理
- ③ 最終提出と3学期に向けての見通し確認 >ワークシートの提出

高1イ組42名 創作指導ポイントピックアップ

クラス	番号	名前	1	2
	a		パートの音量バランス	
	b			
	c		不協和音の避け方・主旋律の変化の付け方	
	d		適切な楽器選択・和音の付け方	
	e	テンポの変え方	副旋律の作り方>それを楽譜に記入する方法	
	f	連符の打ち方	迫力ある楽器選択・和音の付け方	
	g		ドラムの扱い方	
	h	そもそもFlatの可能性	和音の作り方	
	i	ドラムだけを聴きたい時がある	和音の付け方（ギター・ベース）・副旋律の付け方	
	j	打楽器（ドラム）の扱い>適切な扱い方	和音の付け方（ギター・ベース）・タッカのリズム	
	k		音量のバランス調整	
	l		副旋律の作り方	
	m		音高の適切な操作調整方法	
	n			
	o	進度が遅い	複数の楽器のバランスのとり方	
	p	思った音やリズムを楽譜にする方法	<同じ	
	q		和音の付け方	
	r		変奏曲にしたいが、ごちゃごちゃしていないか	
	s			
	t	適切な楽器選択	適切なバランスのとり方	
	u		何をすればよいのか、そもそも分からぬ	
	v		ピアノの既存曲を参考にしている	
	w		原調で作りたい>アレンジのより良い方法	
	x			
	y			
	z		軽快にするための楽器選択や和音の使い方	
	aa			
	bb	過去のデータが消えてしまった	和音の組み合わせ方	
	cc	休符は何処にあるのか		
	dd	操作が難しい	工程が多い	
	ee		単調なアレンジしかできない	
	ff		1つの楽器が音楽を支配しないようにしたい	
	gg	間違えた時に1つだけ戻りたい	弦楽4重奏のバランスのとり方・主旋律以外の扱い	
	hh			
	ii	間に休符を入れたい		
	jj		良い感じの和音とリズムの作り方	
	kk		伴奏、ベースラインの作り方・和音の合わせ方	
	ll		和音の付け方・楽器の特徴の活かし方	
	mm		和音・副旋律の作り方・原曲との差別化	
	nn		楽器の扱い方	
	oo		副旋律の作り方	
	pp		リズムの作り方	

実践上の留意点

1. 授業説明

本実践は、高等学校第1学年芸術音楽選択クラス イ組を対象に、今年度初めて行った創造的な取り組みである。昨今、音楽の世界ではDTM（デスクトップミュージック）の需要は高まる傾向にある。コンピュータを使用した楽興創作のツールは様々なものが存在するが、学校の音楽授業で取り上げる意味を考えるに、やはり五線の読み書きの力を育てることが必要だと授業者は考えた。

授業者は、先行導入校（中学校）の授業実践を参観する機会があり、教育的な機能が豊富な「Flat」の存在を知った。高校選択芸術音楽の授業では、どのような展開が可能であるか？という疑問が、本単元を始めるにあたっての主な動機であった。対象クラスの生徒たちは概ね音楽の活動に対して前向きであり、器楽活動・歌唱活動どちらも前向きに取り組むこと出来る集団である。しかしながら、今回の創作領域（編曲）のような授業は初めての事であり、生徒のみならず授業者自身も手探りの状態であった。ただ時代背景が後押ししているのか、コンピュータを使った音楽活動そのものについては興味を持って取り組むことができた。この学年にはあと2つ（全体で3つ）の同規模の音楽選択クラスがあるが、同単元での授業を展開した。今後の見通しであるが、年が明けて3学期には3月頭を目標として「フリーアンサンブル」の取り組みというものを本校音楽では昔から行ってきた。授業者としては、今回のDTMの単元によって、コンピュータ使用が音楽表現の重要な選択幅として結び付いていくことを期待しているところである。

指導にあたっては、各クラスに数名在籍しているFlatの経験者を授業者のアシスタントとして依頼し、授業内の様々な場面で活躍してもらった。特に、ソフト操作説明や、編曲段階で行き詰っている生徒への個別対応などの場面で、大いに協力してもらった。また、中間発表の場での相互評価では、特に課題指摘をする場面において消極的な面が見られた。授業者は普段の人間関係などが背景になつて心理的抵抗があり、それが拭えなかつたことが原因であると考えたが、研究協議において「評価の観点の曖昧さがあつたのではないか」との指摘があり、想定外の指摘だったが、確かにと思わせられる着眼点であり、今後の改善の余地のある観点だと反省している。

2. 研究協議より

研究協議では、主に2つの指摘があつた。

- ① 生徒同士の相互評価で、課題を出し合う点において積極性が見られなかつたのは、そもそも「評価の観点が生徒たちにとってあいまいで不明瞭だったことが原因ではなかつたか？…この観点は授業者も気づけない盲点であった。その後未実施のクラスの中間発表において、評価の観点を明瞭にしたら、確かに具体的な発言が見られた。この観点は、今後の課題になった。
- ② 生徒の個性を最優先にするあまり、基本的な和声展開などの理論面の破綻が見られたのは残念だった。全てを生徒個々に任せるのではなく、基本的なレールは全員共通のものを経験させる段階が必要ではないか。…これは授業者自身悩んでいた側面だったため、今後の有効なアドバイスとして捉えることが出来た。特に取り組みに入る初期段階において、具体的な課題プロセスを全体を対象に課すことと考えてみたい。